

保 育

この号もいちおう前号のゆき方で、山下俊郎先生の「問題行動の考え方」には表面の問題点をのみ取り上げずそのかくれた問題点をつき将来までも及ぼす問題点を指導すべきだと、教えてくださる。

「思い出」は私ともよくお名前をうかがう、「童話のおじさん」岸辺先生の思い出話、何か昔なつかしい温まる気分がする。

神戸大学の高橋省己先生の喧嘩についてのお話は、喧嘩ということを学問的に分析し、その指導が語られてある。むずかしい喧嘩の指導の参考になるでしょう。

足立区立関屋幼稚園の清水エミ子先生の「交友について」はいわゆる研究発表で、幼稚園の先生の実験の研究事項としてよき

資料としてよめる。

増生先生の「冬の自然の中に」は観察事項の乏しい冬の資料として参考となる。幼児との会話で通しているのも取りつけ易い点かもしれない。

みんなのたのしみになっている幼児画問答は第七十九回、宮武先生はベイベープリントという新しい遊びを紹介しておられる。

副島先生の全国保育事業研究大会の報告は盛会だった会の模様がうかがわれる。

平井信義先生の「ヨーロッパを旅して」は歐洲の家庭での親たちの子どもに対する愛情が語られている。

内山憲尚先生の人形芝居の真のあり方、クリスマスツリーの作り方、「絵本ひかりのくに」の解説はそれぞれ短い中に実際すぐ役立つ資料を提供してくれる。

保 育 ノ ー ト

(子ども会特集)

先月号の「遠足」と同じく、幼稚園における一つの行事として、最近とみに盛大に行われるようになってきた「子ども会」について再検討をし、その好ましいあり方、会のもち方を、いろいろの方向からみ、又劇遊び、器楽合奏・紙芝居・人形劇・かけ絵などの実験面が扱われている。

その、「好ましい」「好ましくない」ということは、人間個人個人によってその解釈がちがうので、それぞれの好ましいと思うもち方をしても、いろいろの性格をもった会が出来上るわけであるが、「望ましい形」としては子どもの普段の生活の中から生れた自然のものを、機会をみて指導者がとりあげ、適切な指導を加えながら、子どもとともに作り上げられた形のもので組まれた、プログラムであることであるが、そのためには、指導者に十分な計画と心がまえが必要である。こういうことは、理論としては十分にわかっているが、実際には必ずしもそういいない場合もあるわけなの

で、自分たちの会のもち方について、改めてふり返ってみるのによい機会を与える。

その正しいあり方をはばむものに、親との問題がある。親は兎角自分の子どもを中心に考える傾向がある。この方は普段から段々に両親教育をして、保育というものの本来の意義・姿を分らせる努力をすると共に、指導者の側は、ゆがめられた大人の要望にこたえることを目的としたようなことにひっぱられない、保育に対するしっかりした信念を持たなくてはならないことが述べてある。

ある会で、われわれをびっくりさせるほど上手にしてみせてくれればくれるほど、その過程をみせて頂きなくなるものである

## 保育の手帖

先月号では、大体のこの本の傾向や内容

の種別などを大まかにご紹介したが、今回は保育講座健康篇をご紹介し、的確な知識を得、また多勢の幼児を集団生活させる上の指針として、よく考えてみたいと思う。

風邪・咳について中央保健所予防課長の宇留野勝正医学博士がかいておられる。要約をすると、かぜには二種類あり、インフルエンザ・ビールの感染によって炎症を起す流行性の場合と、いわゆる風邪といわれる寒さの刺激のために粘膜が炎症を起こす場合がある。咳は何のために起るか、病気によって特徴のある咳を再認識しておきたいと思う。

1. かぜ（咽喉頭の炎症）  
力の強い大きな浅い咳。数は多くなく寒い空気を吸ったとき多い。

2. 扁桃腺（口蓋扁桃のはれ、かぜの一部）  
のどに邪魔物がつまり息がぶつかるような咳。

3. シフテリア（咽喉シフテリア）  
白い義膜に息がぶつかり大吠性の咳。

この場合がひどい場合と区別が不明瞭。  
4. 気管支炎（かぜがこじれた場合）  
たんのからんだような深い感じの咳。数

が多く、夜間に多い傾向がある。

5. 気管支肺炎（かぜ↓気管支炎↓肺炎）  
小さい力の弱い咳。数は多くないが、咳のたびに苦しうな呼吸をし、全時期にわたって咳が出る。

6. 大葉性肺炎 回復期に多く咳が出る。

7. 百日咳

かかりはじめにはかぜと同様の咳。四、五日経つと特有のけいれん性の咳。数多くつづき顔を赤くしその後、あとに引く状態。日中や夜中睡眠中には比較的少い。軽症の場合のかぜのような咳が二〜三カ月もつづき、病気の感染源となる。

8. 肺結核 力の弱い咳。子どもには少い。

9. 神経性の咳 心配なし。

10. 異物を吸い込んだ場合 はげしい咳がづく。さかさにして背中をすぐにたたき講座の概略は以上であるが、保育者はこ

これらの知識は常に持っており、朝の視診の時からよく注意して流行を防ぐように気をつけた。軽いかぜと思つて登園させる家庭側にも、大いに協力して貰うべきであり、保育中、咳が常態と變つていた場合など、帰園の際家庭に連絡を怠らないようにしたいと思う。昨春秋、全国的にかぜがはやつたので特にこの項をとりあげ第三保育期を健康に過して頂くようお願いしたい。

## 幼児と保育

十二月号は「幼児教育の問題点を反省する」を特集している。幼児教育の問題点!!何を幼児教育の問題点としているのであろうか、と飛びつくような興味で開いた。「反省する」の言葉に、無意識のうちに、指導方法とか環境構成などの点を期待して、吸い込まれるようなきおいで読み耽つた。

編集は、保育の場においての問題点、幼児の生活においての問題点、施設の面、保母同志の間の問題点というふうにくぎつて、問題点を展開している。保母と園長の間の問題を除いては大体は保育所の方に多い問題である。

子どもたちの可愛想な生活、情けない施設、ひどい待遇、園長と保母の間の垣根等、まったく憂うつになつてしまふ。どんなにもがいてみても、保母一人の力ではどうにもならない。

しかし実存するこれらの記録は「幼児と保育」の読者に知つて貰うだけでは惜しい。どうかして生かさなければならぬ。

このような實際例をもっともつと沢山集めて、母親大会とか福祉事業大会などの問題として取り上げて貰ふことなどはどうであらうか。そして世論を喚起し、為政者の奮起を促して、良い幼児教育の施設が、必要満たすぐらいに沢山にでき、先生の待遇もせめて人並みにまで改善され、保障制度

も確立されて、一日も早く、一人でも多くの人が仕合せな生活を楽しめるようになりたうものだとねがわずにはいられない。「最大多数の最大幸福」という哲人の言葉がひとりでに口ずさまれる。

幼児教育の現場に、このような現実の存在することを、すべての幼児教育者は知つていなければならないと思う。

## 幼児の指導

十二月号では寺西春雄氏の「音楽による性格形成」の一文が心に残る。氏は、音楽は単なる情操教育の域にとどまるものでなく、もっと個々の人間の全人的な性格形成を求めて、始めてそこに眞の音楽教育の成果があげられる。子どもの聴力は素直で巾の広い能力を備えている。幼児にすぐれた音楽を正しい音で聴かせることは、音に対

する感覚を健康に育てる上に絶対に必要なことである。家庭や幼稚園においても、低俗な音楽をできるだけきかせない配慮が大切で、一歩進んでよい音楽を正しく聴かせるように努力したい。また、音楽によって望ましい性格形成を求めるには、子どもに劣等感を与えず、生来誰しも持っている健康な音楽的能力をいかに歪めないままに伸ばしてやることができるかということが、特にたいせつである。細心の配慮をくばりながら、すぐれた音楽を子ども自身で音楽することの喜びを知ったとき、音楽による子どもたちの性格形成にめざましい成果が期待されるとのべておられる。

その他、「幼児のオーケストラを作ろう」「母親のコーラス指導」「園にこれだけのレコードを」「音楽遊び」などの記事もあり、『園にリズムを』の特集号である。

## 保育の友

十二月、戸外は木枯しの吹きすさぶ季節であるが、明るい室内でストーブをかこんで困らんする者は、屋外のきびしい寒さを知らない。それと同じように、恵まれた保育環境のみ眺める者は、自分たち以外の環境をともしれば忘れがちである。

特集・第三の保育施設（執筆者 鷺谷善教・北添忠雄・森多恵子・増淵玉枝・まき修二・城戸幡太郎の諸氏）を読むと、働く母親のねがいが、すなわち、安い経費で、時間的にはできるだけ長く、そしていつでも入れ、そして乳幼児をも預てくれる保育所であるために、そこに働く保育たちはどれほどの困難を克服しつつ仕事に励んでいるかを知り、全く頭の下る思いがするのであった。

現在の幼児教育は幼稚園と保育所に區別して行われ、幼稚園に対する保育所の必要は、社会的階層による生活条件に由来しているといわれている。しかし、子どもにあらわれる社会性の発達を問題として、それを社会生活へ適応させるように指導する性格教育、性格形成の生活訓練という幼児教育の原理からは、幼稚園と保育所の保育に區別があつてはならないはずである。

しかしながら望ましい保育をなしうるためには、ある程度客観的にそれに必要と見なされる条件が整っていないければならぬ。そこで保育所の設置基準が制定されたのである。保育所の設置基準に概当しえないもの、これが無認可保育所、この特集において第三の保育施設と呼ばれるものである。いったいその数はどの位あるであろうか。無認可保育所の数は全国に約一千箇所との推測には、唯々暗然とするばかりである。しかも無認可施設にさえも通いえぬ所謂保育に欠ける幼児が、まだまだ全国に数

多く残されているとあっては、児童福祉に対する社会保障制度そのものに疑問をもちたくなるほどである。働く母親たちの願うよりよき保育を実現するためには現存の無認可保育所の形式、内容の充実と保育所の新設が、当然政府の手によって配慮されることが必要なのではないだろうか、『保育の友』十二月号を読んで強く感じた。

## 月刊保育カリキュラム

この本の今月のカリキュラムの目標は、「創るよろこび」となっている。それだけに各保育内容にこの面が出ていて、特に絵画製作や音楽リズムによくうかがわれるのであるが、音楽リズムの中の劇的表現を紹介する。

クリスマスに劇をする等ということになると何か整った形を要求し、脚本を探して

それをそのまま子どもの方に持ち込むということになり易いのではないかと思うが、この本のように、先生の話すサンタクロースや常盤木の話が、そのまま次々と子供の動作となって表現されていたら、どんなにいきいきした生の子どもの姿だろうと思う。自由表現は一見まとまりがないように見えるので、親の受けもよくないので、よくこの点問題になるようだが、真の子どもの事を考えたら、親への見栄等問題でない。もっとこの本のような行き方が、どんどん取り上げられなければならないと思う。

またこの本の両親教育の所で、こんな面も指導してよいのではないだろうか。

ついでに、「仲よしあそび」としてリズムカルな暖かくなる遊びをあげてあるが、簡単であって、しかも子どもたちが喜び、子どもたちに考えさせる余裕をもたせ、新しい遊びが次々展開されると思うので実に面白そうである。他の頁も「創るよろこび」が感じさせられ参考になると思う。

## 幼児の教育 第五十六巻 第三号

◎ 定価 五十円

昭和三十二年二月二十五日印刷  
昭和三十二年三月一日発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学附属幼稚園内  
編集兼 津 守 真  
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町二ノ五

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願い致します。